

私の「我流」文化財修行

岡山大学大学院社会文化科学研究科・文学部 教授 久野 修義

この春定年を迎えるにあたり学芸員課程関係者として何か一言を、というわけで、僭越ながらごく私的な思い出話でその責めを塞がせてもらうこととした。

私の博物館学実習の授業を受けた人は、最初に「資格」と「資質」の話がひとしきりあったことを記憶しているだろうか。学芸員「資格」のための受講は、学芸員「資質」養成とは別物であり、後者抜きの単なる単位取得では学芸員課程教育は形骸化してしまう。授業を「資質」養成のための契機として、その後の自己鍛錬を大切に、と。

こんなことを毎回言っていたのは、私自身の体験が深く関わっている。私は学芸員資格のための正規プログラムは一切経験していない。あまり口外するのも気が引けるが、古文書調書の作成法や、卷子本・掛軸の取り扱いなど、すべて「我流」で学んだことであった。

大学三回生の専門課程早々の古文書演習は、各人に中世文書の現物を配布してのものだった。考えられないほどの贅沢であるが、当時はそんなことは思わず、くずし字判読に汲々とするばかりだった。しかし学びの初めに原本古文書に触れた印象は強烈で、現在の岡大日本史の古文書演習が池田家文庫実物を用いることにもつながっている。

身近なところに古文書・古記録があるという恵まれた学習環境だったが、学生・院生時代にそれを活かすことはあまりなく、それよりも学外での体験が大きかった。1997年・98年に東寺百合文書・東大寺文書がそれぞれ国宝となったが、前者は京都府が購入した際、「紙くず」に多額の支出をしたと府議会で大問題になるほどの状態で、古文書は文化財に認定されるまで丹念な調査・整理が不可欠なのだ。そんな作業時期がちょうど私の学生・院生時代に重なった。幸運なことに奈良国立文化財研究所(当時)が行う作業の下働きに参加させてもらい、東大寺文書をはじめ奈良や京都の寺院史料の調査を

体験できた。その折の耳学問や見よう見まねがじつに大きな財産となり、さらにその後の自分の研究テーマにも影響することになった。

最初の就職が1980年の京大助手で、制度上は講座助手だったが実際は博物館(通称、陳列館)古文書室の一人職場。学内外からの史料閲覧・撮影・掲載・借用申請への対処や出納業務などに右往左往した。前任者からの業務内容を引き継いだ際のメモはノート一冊、施錠管理すべき部屋やロッカーの鍵は20センチ四方の箱に溢れていた。有識者が来館するとこの時とばかりに蘊蓄を傾けてもらった。まったく主客転倒である。そして希有な経験としては陳列館建物の改築に遭遇したことで、概算請求のための資料作りから図録パンフの作製まで、膨大で雑多な仕事に降りかかってきた。予算がつくと、今度は所蔵史料すべての引っ越し作業の下準備から陣頭指揮まで。私の「助手」時代は、余人ができぬ諸事雑多な修練・修養を余儀なくされた「たすけて」時代と称するのがふさわしい。

大学博物館が整備発展する時期であったが、学外では、「紙くず」扱いだっただ東寺百合文書のように、国宝指定されWEB公開から世界記憶遺産へ、という動きも私の修行時代とピッタリ重なった。70~80年代以来の文化財整備の営みを目の当たりにできたことは実に幸運であり、多くの学びができた。IT時代となっても、ナマの現物や現場の迫力は不変で、これこそ人を育てる大きな力だと思ふ。面倒や困難に直面してもそれを自らの課題とすることで、他者の助けも得ながら私たちは成長していく。この姿勢は学芸員資質の養成ばかりでなく生き方にも大きく寄与することだろう。現場・現物こそが人を育む、ささやかな私の経験からではあるが、強くそう思っている。



本コラムの内容をランチタイム企画にて語る久野先生

私の好きなミュージアム 吉備路文学館

大学生になり岡山に通うようになってから、訪れる機会ができたのが、吉備路文学館でした。私は日本近現代文学を専攻しているため、レポートを書く際などにここをとっても重要するようになりました。

二階建てのこの文学館では、内田百閒・坪田譲治といった近代作家から、あさのあつこ・原田マハといった今ときめく小説家まで、岡山ゆかりの文学者であればドンと来い！とばかりに、たくさん企画展が行われています。常設展示がない代わりに、いつも新鮮な気分で見学して回ることができます。文学館のまわりは武家屋敷の面影を強く残しており、緑にあふれ、庭園を流れる疎水の中で、鯉が悠々と泳ぎまわる姿を見ることもできます。

今年の七月上旬、私はこの吉備路文学館で、学芸員課程の一環として実習をさせていただきました。今秋にある特別展に関しましては、私も実習の一環として、文章パネルの作成などを手伝っていただきました。七月半ばからは夏目漱石

展が行われるということで、職員の方々はみな忙しく、しかし生き生きと展示準備に取り組んでいらっしゃいました。職員の方々の雰囲気はとてまあたたく、実習の傍ら将来の進路について悩んでいた私を、本当に自分がやりたいことをやれば良いんだよと励ましてくださいました。このあたたかい館内の雰囲気が、普段の企画展を成功に導いているに違いないと感じました。

思えば吉備路文学館を訪れるまで、私は岡山ゆかりの文学者についてほとんど知りませんでした。でも実は岡山には、驚くくらい多くの文学者がいるのです。

大学を出ても吉備路文学館は、私の大好きな文学館として、存在し続けるに違いないと思っています。文学専攻の学生でなくても楽しく見学することができますので、ぜひ一度、足を踏み入れてみてください。

(文学部人文学科言語文化学専修コース 森永 理恵)



学芸員課程 Newsletter

Newsletter from Course for Prospective Museum Workers, Faculty of Letters, Okayama University

編集・発行: 岡山大学文学部学芸員課程 (編集 光本 順) 発行日: 2017年3月15日 文学部学芸員課程Web Site http://www.okayama-u.ac.jp/user/pmw

contents

特集 第4回学芸員課程企画展 光本 順 1 博物館実習生による企画展報告 坂下 奈津紀・土井 朱夏・長谷川 奈保・三島 大仁・中川 朋美・新納 沙也果 2・3 私の「我流」文化財修行 久野 修義 4 私の好きなミュージアム -吉備路文学館- 森永 理恵 4

本号では第4回文学部学芸員課程企画展「おかやまさんぽ」を特集します。これは人文系博物館実習の一環で、当学芸員課程が2016年12月8日から20日に開催したミニ展示です。会場は昨年度と同様に岡山大学附属図書館・中央図書館本館2階の学修スペース「サルトフロresta」です。お借りした2台の展示ケースそれぞれに小企画展(「あしもとに広がる桃太郎の世界」展と「今昔くらしき」展)を実施しました。展示にあたってお世話になった附属図書館の皆様へ感謝申し上げます。

テーマ設定から内容に至るまで、展示ケースひとつ分の展示を自由に、しかし実現可能な形で構想する、という課題を実習生各自(32名)に与えたのが10月初頭。その後、グループワークにより生まれた6つの企画案から二案を実際の展示と

して実習生が選出しました。展示を完成させる班やチラシ作成班、本特集記事のような報告班等に別れて個別の作業は行いましたが、それぞれの案の発表とディスカッションというブラッシュアップの過程が何より欠かせませんでした。なお今回惜しくも選ばれなかった案の中にもキラリと光るアイデアや内容が多く認められました。

また本号では、2017年1月19日開催の第8回学芸員課程ランチタイム企画「トーク・ミュージアム」における久野修義教授の貴重なお話、ならびに今年度の館園実習(実際の博物館施設に一定期間受け入れていただく形の実習)に関するコラム記事を掲載しました。2つの記事に共通するのは、現場や現物で学ぶことの意義・重要性といえるでしょう。これは当課程が意識的にめざす学びの方向性でもあります。(文学部准教授 光本 順)



完成した展示

特集

第四回文学部学芸員課程企画展

博物館実習生による企画展報告

準備

今回の企画展は人文系博物館実習を履修している学生を中心に10月から準備を始めました。展示実践の一環として、私たち実習生は、まず、岡山にかかわる内容の展示というテーマに沿う企画を考えました。その後、6班に分かれ、展示企画を持ち寄り、プレゼンテーションを行いました。その結果、「あしもとに広がる桃太郎の世界」展と「今昔くらしき」展に決まりました。また、全体での展示テーマは「おかやまさんぽ」に決定しました。それからは、班ごとにポ

スターやアンケートの案、展示方法について考え、全体で話し合い、準備を進めていきました。学芸員課程の講義・実習の中で学んできたことを活かし、意見を出し合いながら、実習生全員で展示をより良いものにする目標を定めました。そして、12月7日に岡山大学附属図書館2階サルトフロrestaにて設営を行いました。

(文学部歴史文化学専修コース 坂下 奈津紀)

「あしもとに広がる桃太郎の世界」展

岡山県に桃太郎の像やキャラクターが数多くある中で、普段見過ごしてまいがちなマンホールに焦点を当てた展示が「あしもとに広がる桃太郎の世界」です。小さくても深いデザインマンホールの世界と桃太郎伝説について知ってもらいたいという思いから、新見市の鬼マンホールと岡山市の桃太郎マンホールを取り上げました。マンホールそのものを展示するかわりに実際の写真をパネルに貼り、その特徴と設置してある場所を紹介しました。平面の展示物がケース越しでも見やすいように、パネルやキャプションに角度をつけるといった工夫をしています。すでに桃太郎のデザインマンホールについて知っていた人もはじめて知った人も「おかやまさんぽ」というテーマ通り、デザインマンホールを探しに岡山を散歩したくなるような展示になったのではないのでしょうか。

(文学部歴史文化学専修コース 土井 朱夏)



「今昔くらしき」展



企画展の二つ目は、倉敷市の工芸品を紹介する「今昔くらしき」展です。倉敷には、昔ながらの伝統的なものから現代的なエッセンスが加えられたものまで様々な工芸品があります。今回は、倉敷はりこ、倉敷帆布、倉敷市児島名産のデニム小物、倉敷が発祥の地であるマスキングテープの4つの工芸品を展示品として取り上げました。今回紹介できたのは一部ですが、この展示を通して倉敷発祥の工芸品について広く知ってもらいたいという思いで企画しました。内容はもちろん見た目からも楽しんでいただけるように、パネルやキャプションのデザイン、展示品の並べ方など、色とりどりでかわいらしい展示になるよう工夫しました。展示台そのものも倉敷美観地区の白壁をイメージしており、見に来てくれた方が思わず興味を惹かれて足をとめるような展示を目指しました。

(文学部歴史文化学専修コース 長谷川 奈保)

展示設営の様子

「あしもとに広がる桃太郎の世界」では、主な展示資料としてデザインマンホールのパネルを作成しました。展示設営では、限られた展示スペースのなかで、パネルやキャプションなどの大きいものをいかに見やすいよう配置できるかという点で苦心しました。

「今昔くらしき」では、学生が所有する倉敷市の工芸品を展示しました。小さい資料と、大きい資料が1つの展示ケースに共存できるようにバランスのとれた配置を目指しました。

(文学部歴史文化学専修コース 三島 太仁)



アンケート結果・分析

当企画展「おかやまさんぽ」では、ご来場いただいた方々にアンケートの記入にご協力いただき、全体の満足度と、展示を通してご紹介した場所に訪れたいと思ったかどうかを評価していただきました。その結果、両項目とも満足（とても訪れたい）もしくはおおよそ満足（どちらかといえば訪れたい）という意見が大半を占めており、おむね満足いただけたかと思われます。また各展示の展示評価を平均値で算出したところ、「あしもとに広がる桃太郎の世界」展はタイトル・展示品で、「今昔くらしき」展では展示品と配置において、5点中4点以上の高評価をいただきました。目立ったご意見としては、デザインマンホールや岡山の歴史・文化が知れてよかった、今回の展示を通して新しい発見があった、展示にデザイン性があったよかったというコメントをいただきました。特に展示した資料の中でも、デザインマンホールや倉敷はりこについてはあまり知らなかったという方も多く、今回の展示が改めて岡山のことを知っていただく機会になれば一同大変うれしく思います。

一方で、展示物についてより詳しい説明がほしい、「あしもとに広がる桃太郎の世界」展は地図・現物がほしいという声もありました。各展示の5段階評価の平均値のグラフにおいても説明文の平均値が比較的低いことから、限られたスペースの中でもどのように情報を盛り込み、表現していくかという点が今後の課題となったと思います。

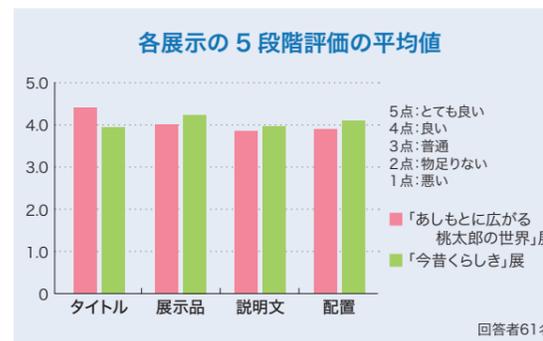
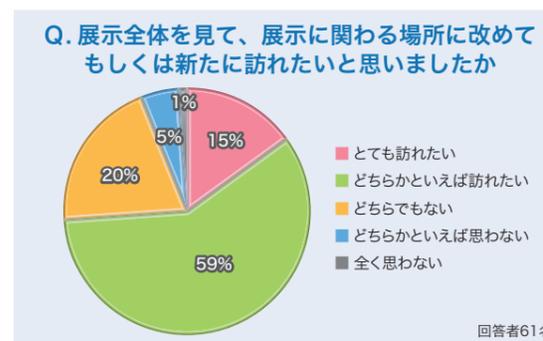
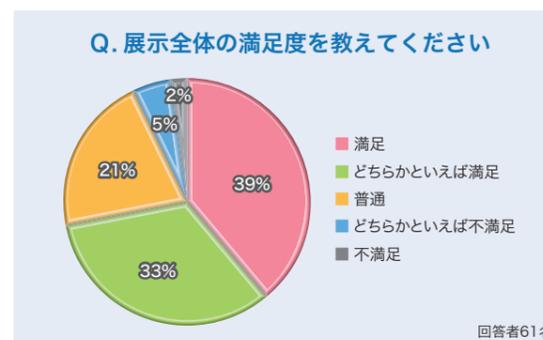
また今回の企画展は学芸員課程の学生が手掛けた展示ということで、アンケートにお答えいただいた方々の多くは受講生でした。アンケートの設置方法もひと工夫必要かと感じました。

最後になりましたが、今回アンケートにご協力いただいた皆様方に心より感謝いたします。

(社会文化科学研究科社会文化学専攻 中川 朋美)

まとめ

今回の企画展は、展示の立案から設営、撤収にいたるまで、学生が中心となって行いました。展示のテーマに関しては、ユニークで興味深い展示案が多く挙がるなか、より来場者を楽しんでいただけるような内容のものを選定しました。その後、展示資料の収集や展示のレイアウト、広報用のポスター、アンケートの作成等、試行錯誤を重ね、意見交換をして改良をしながら、ようやく実際の展示までたどりつくことができました。企画展終了後は、撤収作業を行いアンケートの集計を行いました。展示の内容に関しては満足度が高く、展示の目的を達成することができたと思います。一方で、展示の説明文に関しては、来場者にはわかりにくいところがあったり、足りない部分があったりと、自分達には見えていない部分もあったということが再認識



できました。この実習を通して、展示全体の作業や、その際に生じてくる問題等をいかに解決していくかを学ぶことができたように思います。また、アンケート結果から、来場者にとって満足度の高い展示を提供することができたということがわかり、一つの展示を完成させたという自信に繋がりました。その反面、今回の展示の改善点等も知ることができ、来場者の意見を取り入れること、その意見を活用して今後の展示に活かしていくことの重要性を知ることができました。今回の企画展を通じて得た経験を、今後も活かしていこうと思います。

(文学部哲学芸術学専修コース 新納 沙也果)